

臨床心理士・公認心理師試験対策授業を見学して

留学生教育センター 特任講師
修士（文学） 大谷崇

1月30日（土）3限・4限の授業研修会に参加して学んだことについて報告する。

当日の授業内容は、臨床心理士試験の選択問題対策であった。先週の論述試験対策と同様、科目の担当教員に加えて、中島恒雄総長先生御自身による御指導が行われた。

見学教員には、事前に過去の試験問題の抜粋14問と、解答・解説の資料が配布されていたが、内容は臨床心理学の理論・用語の知識を問う高度に専門的なもので、さらに解答形式が複雑である。私は「このような難解な試験問題の対策授業をどのように行うのだろうか」と思いながら授業見学に参加させていただいた。

授業では、受講生を1人ずつ指名し、①問題文や選択肢を一つずつ音読させた後、②解説文も音読させ、③その都度30秒～1分間時間をとって暗記させる、さらに④一つの問題ごとに3分間時間をとって、暗記した内容を再度定着させる、ということを繰り返していた。

暗記時間の計測にはストップウォッチを用い、担当教員がその都度残り時間を「あと〇秒です」と知らせ、スピード感と緊張感のある授業が展開されていた。その間、担当教員による用語の解説等はなく、ひたすら問題文・選択肢・解説文の音読→暗記を繰り返していくという方法がとられていた。

授業の冒頭で、総長先生から、「何よりも“試験に合格する”ための授業をする」「教員は余計なことをしゃべらない（余計な説明を加えると、学生の側は暗記すべきポイントが分からず、かえって混乱する）」「学生全員が理解でき、合格できる授業をする」ように、徹底した御指導があった。上記の授業方法は、その指導方針に則ったもので、実に合理的であった。

4限の最後に、今日の授業で学習した範囲の「確認テスト」が行われたが、受講生全員が全問正解であり、今回の授業方法の効果が証明された。

学生への受験勉強の指導は、ただ「勉強しろ」「暗記しろ」と言うだけでは、学生はどうしたらよいのかわからず途方に暮れてしまう。それに対して、今回の授業では、何をどれだけ覚えればよいのか、その場で明示し、授業時間内に暗記させることに成功していた。実に明解であり、着実な方法である。

本学の授業方法は、総長先生の御著書にも書かれており、実際に過去の資格試験でも多くの合格者を輩出していると述べられている。今回もこれだけ徹底的に過去問練習と暗記に取り組んでいる受験生は他にいないはずであり、本日の受講生は臨床心理士試験本番でも全員必ず合格するものと確信している。

私は臨床心理学については専門外であるが、今回の合理的・明解・着実な試験指導法に関しては学ぶところが多かった。総長先生の「学生が努力するのを助けるのが教師」という御言葉も説得力があった。「できなかった子をできる子にするのが教育」という本学の教育方針に則り、自らの教育技術を少しでも向上できるように努力していきたい。